

もっと知ろう “陶”

16、胸像二体

陶では毎年8月13日に桜ヶ丘公園にある陶祖碑の前で陶祖祭が執り行われます。今回はその陶祖祭にちなみ陶町の陶磁器産業に功績のあった人物の立派な胸像二体を紹介したいと思います。

○曾根昇三（M24～S24）像

明治43年（1910年）陶の陶磁器産業の実質的陶祖である曾根庄兵衛の山庄製陶所を継いでいた曾根猪之助が没すると、その息子の初代曾根昇三が後を継ぎました。初代曾根昇三は、石炭窯の導入、磁器タイルの生産、トンネル窯の導入などで、陶のみならず東海地区の窯業の近代化に大きな功績を残しました。

昭和35年（1960年）『曾根100年祭』が領分立工場で盛大に催された際、初代曾根昇三の銅像が建立されました。銅像は今、桜ヶ丘公園で陶祖碑・祖父にあたる庄兵衛の紀功碑と向き合って進取の精神の大切さを伝えています。



○伊藤嘉市（M23～S39）像



大正7年（1918年）山五陶業は創業者伊藤五郎右衛門の他界により伊藤嘉市がその後を継ぎました。嘉市は技術力で会社を着実に成長させると共に、社長業の傍ら恵那陶磁器工業組合の理事長、陶町長などをも勤め、陶の発展に多大な功績を残しました。また、昭和31年には岐阜県産業人初の藍綬褒章を受章しています。

昭和26年 嘉市社長の還暦を祝って労働組合員がお金を出しあいブロンズ製の胸像を贈りました。従業員（組合員）と共に汗する労使協調の鑑だった人でした。

今は旧山五の食堂横で、大規模ソーラーの地となった工場跡地を見つめ鎮座しています。モクモクと煙を出した昔とクリーンなソーラーと、あるいは騒々しかった昔と静かな今を対比して感慨に浸っているのでしょうか。